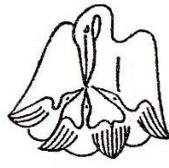


阿佐ヶ谷教会



信友会会報

11月例会（11月22日開催）報告



使徒言行録の学び（第24回） 船本弘毅先生
—新約聖書 使徒言行録 第24, 25章—

今年もクリスマスを迎える季節がやってきました。阿佐ヶ谷教会でもアドベントクランツが毎週ひとつづつ灯り、私たちの心の内に降誕を祝う気持ちがふつふつと湧いてきます。この間にも地域別のクリスマス会や教会学校の子供たちによるページェントなど、教会が最も活気に満ちたときとなっています。主任牧師不在のままですが皆で祈り、支えあってクリスマスとそれに続く新しい年と一緒に進めていきましょう。

さて使徒言行録の学びは終盤に入りました。今までは1章ずつでしたが、今回は船本弘毅先生に24章25章をまとめて聖書講解をしていただきました。キレの良い話し方で、パウロのエルサレムとカイサリアでの裁判を通じての生き方が心地よく感じられ、充実した学びの時を持つことができました。（Y. O）

『聖霊行伝をたどる—使徒言行録の学び—第24章・25章』

船本弘毅先生

今回は使徒言行録第24章、25章にわたる講解なので聖句毎ではなく、出来事に中心をおいて解説します。パウロを紹介するとき、異邦人伝道を行った人で、それによってキリスト教をユダヤの地方宗教から世界の宗教に変えた功労者と言われます。しかし、パウロが3回の伝道旅行を行ったと事も無げに言うことはできません。この3回の旅程を測った研究者がおります。JRの路線図で当てはめると、第1回旅行は、1040キロで東京—博多間、第2回は1460キロで東京—鹿児島間、第3回は1600キロで軽井沢—東京—鹿児島間になります。パウロたちは水の無い砂漠のこの距離を徒歩で行ったのです。和辻哲郎の名著「風土」には、敢えて水の無い「沙漠」と書き、人を寄せ付けない沙漠の道なき道を歩いた旧約の時代からの信仰の力を見直さなければならぬ衝動を覚えると言っています。

パウロの人物像

パウロは、この伝道に適った人物であったとは言えません。Ⅱコリント第12章7～8節には、私が思い上がらないように肉体のとげが与えられた。私は3度このとげを取り去るように祈ったが、神は「私の恵みはあなたに十分であり、力は弱さの中にこそ十分に発揮される」と言われたこと。それ故自分の弱さを誇ると言っています。パウロの「肉体のとげ」については、眼病やテンカン症を疑われるなどの諸説があります。また、パウロは、容姿的に恵まれていたわけではなく、話し方も上手ではないので伝道活動で各地を訪ねる上では有利とは言えなかった。使徒言行録20章9節には、退屈なパウロの話を聞いていた青年エウティコが眠気で3階から落ちて大怪我をした記事があります。Ⅱコリント第11章16～33節でパウロは使徒としての労苦について語り、投獄、むち打ちなど、難破は3度、旅では川の難、盗賊の難、同胞からの難、異邦人からの難等を挙げています。パウロが、苦難に満ちた異邦人伝道を通してキリスト教をユダヤの地方宗教から世界宗教にする器として用いられたことを思い起こさなければなりません。

パウロは3回の伝道旅行を終えてエルサレムに帰ったのですが、異邦人伝道を称賛されたのではなく、逮捕、監禁が待っていました。ユダヤの最高法院での尋問では、ユダヤ民族、律法と神殿を冒瀆したとして訴えられ、



さらにリンチを加えて殺そうとされましたが、パウロがローマの市民権を持っていたので、ローマの千人隊長に助けられてカイサリアのローマ総督フェリックスの元に護送されました。

カイサリアでの裁判

第24章に入り、1節から9節まで、ユダヤの大祭司アナニアが長老たちや弁護士テルティロという最強の陣容でカイサリアに乗り込み、総督フェリックスにパウロを訴えます。パウロの罪状は、パウロが疫病のような者で、世界中のユダヤ人の間に騒動を巻き起こしており、「ナザレ人の分派」の首謀者であり、神殿を汚そうとしたので逮捕したと言います。

11節から21節までで、パウロはただ一人フェリックスの前に立ち弁明します。

まず、フェリックスが国民の裁判を司る方であるので喜んで弁明すると言って、5つの弁明をします。まず、パウロがエルサレムに着いて12日しか経っておらず、神殿、会堂や町の中で誰かと論争をしたり群衆を扇動したりするのを誰も見ていないので彼らの訴えには根拠がない。次に彼らが「分派」と呼んでいるが、わたしは先祖の神を礼拝し、律法に即したと預言者の書に書かれたことを固く信じていると言います。更に、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を神に対して抱いており、彼らユダヤ人もこの復活の希望を持っていること。そして、エルサレムに来た私の目的は、同胞の支援のためにアジア州などの諸教会から集めた義援金や供え物を献げるといふ明確な使命を持っており、神殿で清めの式にあずかり、供え物を献げる時も人はあまりおらず、騒動にはならなかった。ただ、アジア州から来た数人のユダヤ人がおりました。私を訴える理由があるとすれば、この人たちではなく、彼らが閣下に訴えるべきであると言いました。第23章11節で、夜に、主がパウロの傍に立ち「勇気を出せ、エルサレムで力強く証したようにローマでも証ししなければならない」という声を聴いており、フェリックスの前でただ一人論陣をはる勇気を神から与えられたのでしょう。

ここでの復活の信仰については、パウロの最高法院での弁明でサドカイ派とファリサイ派の分裂を誘う戦略がありました。ここで両派について述べる必要があります。

サドカイ派は、ツァディーク（正義）とダビデ・ソロモンの時代の大祭司ツァドクからくるという説がある。紀元前2世紀ごろ、ギリシャ文化の影響を受け入れ現実主義、合理主義に立つ。祭司、貴族、実業家などこの世的な権力の側にあり、ローマには妥協的である。思想は保守的で復活の思想は支持しない。一方のファリサイ派は、解釈派、分離派の意味で、ファシディーム（敬虔派）からファリシー、ファリサイ派が出てくる。モーセ律法を重んずるとともに預言書など個人的、社会的正義に立ち、敬虔な信仰を持ち復活を受け入れていた。パウロは、両派の信仰的立場を利用して分裂を起こさせたのです。

パウロの弁明を聞いたフェリックスは、ユダヤ思想をある程度理解していたが、両方の主張については理解できないし、ローマ人として両派の思想的対立には興味もないので、千人隊長リシアが上ってくるまでという理由で裁判を引き延ばしたのです。

24節～27節では、フェリックスは妻と共にパウロを引き出して、パウロの正義、節制や来るべき裁きについて聞くと、判決を躊躇します。また、パウロから金を引き出そうとしてしばしば呼び出して話し合うなか、拘束が継続されます。

2年後に、フェリックスの後任として、ポルクウス・フェストゥスが着任しましたが、パウロの裁判について十分な引継ぎをしませんでした。



総督フェストゥスの対応

25章1～5節では、フェストゥスが総督となり3日後にエルサレムに上ります。そこで、祭司長、長老など主だった人たちがパウロをエルサレムに送り返すよう要請します。彼らはエルサレムへの道の途中でパウロを殺そうという陰謀を企んでいたのです。フェストゥスは、パウロはカイサリアに監禁しているので、「その男に不都合があるなら、あなた方の有力者が私と一緒に来て告発すればよい。」と言いました。

6～12節で、カイサリアでの裁判が書かれています。ユダヤ人たちは、パウロを取り囲んで重い罪状をあれこれ申し述べたが、何らパウロの罪状を立証することができませんでした。ユダヤ人は一般的には、狡猾で、金銭的に汚いという印象がありますが、本来律法順守、裁判でも二人の証人を立てて証言が一致しなければ罪に問えないなど高度な法律体系を持っています。ここでも彼らの証言が合わないのでパウロを護送中に無理やり殺そうとしたのです。パウロは、「ユダヤ人の律法に対しても、神殿に対しても、皇帝に対しても何も罪を犯したことはない」と弁明します。

フェストゥスは、ユダヤ人に気に入られるよう、パウロに「これらについてエルサレムで私の前で裁判を受けたいか」と尋ねます。それに対してパウロはきっぱりと「私はここで皇帝の法廷に出ています。私はユダヤ人に対して何も悪いことをしていない。この人たちの訴えが事実無根であるなら、誰も私を引き出せない。私は皇帝に上訴します。」と言います。それを聞いたフェストゥスは、陪審と相談して皇帝の裁判を受けるため、ローマへの護送を指示します。この裁判でパウロには予想された罪状が見つからないと判断したからです。

そんな時に、ユダヤのアグリッパ王が表敬訪問のためカイサリアに下ります。フェストゥスは前任のフェリックス総督が残したパウロの裁判について、パウロを皇帝への上訴のためローマへ護送すること、この問題はユダヤ人の信仰の問題であるので、パウロに会い、皇帝に上程する罪状の詳細をまとめることを依頼します。アグリッパはパウロと面会し、フェストゥスから罪状が見つからない等、裁判の進捗状況を聞きます。

この裁判には、3人の権力者が登場します。ローマのフェリックス総督、後任のポルキウス・フェストゥス総督、ユダヤのアグリッパ王です。彼らは絶大な権力を持っていますが、責任を取って決断することを逃れようとします。フェリックスは判決を行わず2年先送りし、フェストゥスもパウロの無罪を知らながらローマ護送を選択し、責任の一端をアグリッパ王に背負せています。イエスの裁判の時にピラトがとった態度のように、彼等は責任を巧妙に逃れ、狡猾に振る舞っています。一方、パウロは一貫して自らの主張を述べています。

ここで、人の前に立つ人と神の前に立つ人、人を見る人と神を見る人、人を畏れる人と神を畏れる人、責任逃れをしようとした人と責任を担った人、これらのコントラストを聖書は示しています。信仰とは何か、信仰をもって生きることは何かを問いかけており、私たち一人一人がこの場に立っていることを学ぶことができます。

(文責：玉澤武之)